

兵庫県のゴミムシダマシ (1)

(兵庫県甲虫相資料・197)

高 橋 壽 郎*

日本産ゴミムシダマシ類は1969年に中根猛彦博士・益本仁雄氏によって目録として発表されたものによると20族, 85属, 221種が記録されている。その後多くの方々の研究が発表されて来た。即ち宮武睦夫氏(1970), 中根猛彦博士(1973~1985), 芝田太一氏(1978~1980), 中條道崇氏(1973~1985), 益本仁雄氏(1983~1986)等々の研究。益本氏は台湾産のこの科のものの研究が多くあるし(1981, 1985), 東アジア地域の研究もある(1985, 1986)。日本産のものはその大部分が奄美大島以南, 沖縄, 南西諸島産のものである。

日本産全般を取扱ったモノグラフの様なものは無いが中根博士は族の検索表を示され, 族毎の解説をされ(1974), 同博士による54種の図説をされた報文(1949-1950)があり, 1963年に原色昆虫大図鑑Ⅱの中でこの科のものを149種原色で図説された。

1985年中條道崇・安藤清志氏による原色日本甲虫図鑑(Ⅲ)が出版されその中でこの科のものが252種原色で図説された。これにより日本産のこの科のものの同定が非常に楽になった。この解説の中で日本産ゴミムシダマシ科22族, 90属, 305種とされている(世界産約90族, 約1,400属, 約16,000種)。

1986年益本仁雄氏は台湾産のこの科の概説に続いて日本産の概説をとりあげられた。この解説の中で日本産ゴミムシダマシ科のチェックリストを近藤茂昭氏とまとめて甲虫談話会の方に提出されているむね述べられておられる。残念ながらこの報文をまとめている時点では未刊である。この概説の初めに益本氏は日本産ゴミムシダマシ科を29族, 96属, 317種とされている。いずれ引続いて解説が行われるだろうと考えられる。

幼虫に就いては林長閑博士の論文(1966, 1968)の中で67種の幼虫が図説されている。

尚このゴミムシダマシ科の甲虫の中における成虫による分類位置づけに就いては佐々治寛之博士, 同じく幼虫によるものは林長閑博士の貴重な解説がある(原色日本甲虫図鑑Ⅰ, 1986)。

さて兵庫県産のこの類に就いては今迄それぞれ全般にまとめたものは残念乍らない(部分的な報文はあるが—

1894年 G. Lewis 氏が“On the Tenebrionidae of Japan”と題して12属内8新属, 83種内58新種を記載した論文の中で神戸産で4新種5種が記載されている)。そこで現時点で一応県下のこの類をまとめて見ることにした。記録出来たのは92種で日本産の上記の数からすれば大変少ないわけであるが日本産の内奄美・屋久島から南の島々に産する種が非常に多く本州だけに分布する種と云えばそれ程多くなくその数から比べれば兵庫県産のものはそう少なくないと思われる。ただ海岸線ぞいの調査がほとんど出来ていないことや山地帯での調査がまだまだ不十分(採集される方が少ない)でもっとキメ細かく調べたら100種以上はいるような気がする。

今後更に調査をすすめる必要性を痛感している次第である。出来るだけ同定には慎重を期したつもりであるが尚浅学未熟のため誤りもあるかと思う。大方諸賢の御教示, 御指摘を頂ければ幸である。

Family Tenebrionidae ゴミムシダマシ科

1. *Blaps japonensis* (Allard, 1879)

ヤマトオサムシダマシ

筆者残念ながら原記載を見ていないので何処の産で記載された種かわからない(Ab. 17 CN. et F. 1:39, 1879—Leptocolena)。

G. Lewis 氏はこの種のタイプ標本は British Museum にある Bates のコレクションの中にあるとされているが産地は日本とのみで“日本のゴミムシダマシ”の論文の中でも日本で出会ったことが無いと記している(Ann. Mag. Nat. Hist. Ser. 6, xiii, p. 379, 1894)。

分布は日本の本州, 九州と台湾, 北部中国となっているが“中国経済昆虫誌, 第4冊, 拟歩行虫科”(1965)によるとこの *Blaps* 属は9種も図説されていてこの *japonensis* の産地も可成り広く分布しているのか多く挙げられている(中国にはこの属のものは28種もいると同書にある)。

古い家の床下や物置などに群がっていることがあるとのこと。また可成り古い時代に帰化した虫と考えられるとも云われている。

筆者は戦前舞子で数頭採集した記憶があるが標本を無

* 神戸市兵庫区水室町1丁目44

くしたので記録出来ない。県下でもほとんど記録が見られない種であるが大阪には多いと云う記録もあったりするので(日浦, 1978), 県下での調査は不十分なのだろうと考えられる。恐らくもっと広くいるのではないだろうか。

産地: 洲本市安乎町〔堀田, 1978〕*。伊丹市〔河上, 1984〕, 稲荷町〔河上, 1986〕。水上郡春日野相野〔山本, 高橋, 1962〕。出石郡出石町福居〔高橋, 1965〕。

2. *Pedinus (Blindus) japonicus* Seidlitz, 1893

ゴモクムシ

本種は原記載を見ていないのでよくわからない。中根博士の図説(新昆虫, 2巻, 5号, p. 11, 1949. 原色昆虫大図鑑, II. 甲虫, pl. 110, fig. 19, 1963), 中條・安藤両氏の図説(原色日本甲虫図鑑, III, pl. 48, f. 2, p. 295, 1985)がある。

分布は本州, 四国, 九州, 五島列島, 男女群島で対馬にはツシマゴモクムシダマシ *P. strigosus* Falderman を産する。砂地性の種のような。兵庫県下からの記録はほとんど知られていない。黒佐和義博士からの私信によると(1981)魚崎町で冬期土中より掘り出したことがあるとのこと。筆者が採集した鳥原では丘陵の上の砂地の道路上を歩いていたものである。

広島島の灰ヶ峰に至る所で乾燥してカラカラになっていた牛糞の下から多数採集できたこと, さらに広島県の各地に普通にいるとの報告がある(広島虫の会々報, 3: 81, 1964)。兵庫県下でも調査のし方が足りないのかもしれない。

産地: 神戸市魚崎町〔黒佐, 1981〕。鳥原(1♀, 6-VI-1981)。

3. *Idisia ornata* Pascoe, 1866

ハマヒョウタンゴミムシダマシ

原記載を見ていない(J. Ent. 2: 452, 1866)。Marseul氏は“Enoshima and Niigata. Abundant on the sand-hills”と記録すると共に本種はPascoe氏によって満州産で記載されたものであるがDr. Adamsの日本の西岸沿の航海中に集められた恐れが多分にあるようなことも書いている。中根博士の図説(1949, 1963), 中條氏の図説(1985)がある。

日本の北海道, 本州, 佐渡島, 四国, 九州に分布, 国外では朝鮮半島, 中国(北東部)が知られている。

兵庫県ではほとんど記録がなかった種である。海浜性の種は日本海側と淡路島での調査がもっとされなければ

と考える。海岸線が瀬戸内側ではほとんどないのでこの様な種の産出状況調査が困難である。

ただ最近沢田和宏氏は西宮市御前浜で可成り採集しておられる(きべりはむし Vol. 14, No. 2, p. 35, 1986)。恐らく砂地の海岸線があれば見ることが出来ると考えられる。

産地: 西宮市御前浜〔沢田, 1986〕。姫路市白浜の宮(lex., 20-IX-1979)。美方郡浜坂〔高橋, 1975〕。

4. *Idisia vestita* Marseul, 1876

ニセハマヒョウタンゴミムシダマシ

Marseul氏により“Nippon (Hiogo, Kiu-Siu)”を産地に記載された種である(Ann. Soc. Ent. Fr., 5-6: 96, 100-101, 1876)。海岸に多いと書いてある。分布は本州・四国・九州である。中根博士の図説(1963), 中條氏の図説(1985)とある。

県下の海浜性の種に就いては現在全く変わってしまったのではたしてしまっているのか調査が大変難しい状況である。従って本種の県下の産出状況も今一つよくわからない。

産地: 三原郡阿古西町〔久松, 1974〕。Hiogo〔Marseul, 1876〕。明石市林崎(lex., 30-V-1983)。

5. *Mesomorphus villiger* (Blanchard, 1853)

コガシラスナゴミムシダマシ

Blanchard氏がニューギニア産で*Opatrum villigerum*として記載された種である(Voy. Pole Sud. Zool. 4: 154, pl. X, Fig. 15, 1853)。Miedel氏は*Mesomorphus villiger*として記録されている(1880)。

Lewis氏は*Opatrum villigerum*として“Kobe. I found three examples on the sandy seabeach”と記録された(I. C. p. 382, 1894)。

Reitter氏の*Mesomorphus dermestoides* (1904), Fairmaire氏の*M. mustelinus* (1882), *M. puberulus* (1867), Champion氏の*M. dispersus* (1894) 総て本種のシノニムである。

中根博士の図説(1949, 1963), 中條氏の図説(1985)がある。幼虫に就いては林博士の図説もある(1968)。

分布は本州, 四国, 九州, 琉球(奄美大島, 沖縄本島)と国外では東南アジアに広く分布, オーストラリアあたりにも産すると。

海浜性の種であり兵庫県下での分布が良くわからない種である。

産地: Kobe〔Lewis, 1894〕

6. *Gonocephalum bilineatum* Walker, 1858

スジスナゴミムシダマシ

*産地で〔 〕の中のものは記録からの引用, ()の中のものは筆者採集標本所有のもの。

Walker 氏が *Opatrum* 属で記載された種である (Ann. Mag. 3, 2 : 284)。Lewis 氏は *Opatrum orarium* として Kobé. One example” で記載された (Ann. Mag. Nat. Hist. 6, 13 : 380-381, 1894) が本種のシノニムとなる。

分布は広く日本の本州以外の中国、カムチャッカ、東南アジア、ミクロネシア、メネラネシアが知られている。

県下からは Lewis 氏の記録以外記録の全く見られない種でありもっと詳しく調査する必要のある種である。

一般にスナゴミムシダマシ属 *Gonocephalum* のものの分類は必ずしも容易では無い。この属の検索は中條道崇氏 (昆虫, Vol. 32, No. 2, p. 151-153, 1963) 及び中根博士のものがあつた (月刊むし No. 36, 1974) が最近益本仁雄氏が図をいれて検索表を發表されている (ELYTRA Vol. 12, No. 2, 1985) のは大変便利である。また大川秀雄氏がスナゴミムシダマシ属数種の主にすみわけを中心に生態について發表しておられる報文 (昆虫と自然 Vol. 8, No. 8, p. 29, 1973. Vol. 12, No. 12, p. 17-21, 1977) は大変参考になる。

産地 : Kobe [Lewis, 1894]

(未完)

(APRIL 1987)